資料 東京の児童図書館

明治20年 (1887)—昭和20年 (1945)

Children's Libraries in Tokyo From 1887 to 1545

小河内 芳 子
Yoshiko Kogochi

Résumé

This may be the first comprehensive history ever written on the subject. Using as resource materials most dependable library records such as *Calendar of Tokyo Municipal Hibiya Library: 1908-1918* and *Tokyo Municipal Libraries and Their Activities: 1921-1938*, and published histories such as *80 years of Chiyoda Ward Library* (1968) and *Brief History of Tokyo Metropolitan Public Libraries: 1872-1968* (1969), the author traced development of public library services for children from the earliest example in 1887 through rising and widening period of the first thirty years of the twentieth century till forced decline and complete loss during the war.

The author tells in chapters 1 and 2 early history until opening of the children's room in Tokyo Hibiya Library in 1908, and in Chapter 3 administrative problems; services for children under such topics as use of the libraries, extension services; reading trend of the children seen through use of library collections, and story telling program; and conditions of lending collections during the period.

The author is now retired from the practice after serving for almost half a century as a children's librarian and has added the most valuable contribution to the history of children's libraries in Japan by her theses.

1 はじめに
2 東京の児童図書館 その前史
3 東京市立図書館の児童奉仕
3.1 日比谷図書館開設まで
3.2 東京市立図書館設置状況とその変遷
3.3 組織，職制，規程
3.4 児童奉仕

小河内芳子： 元日本図書館協会公共図書館部会児童図書館分科会長.
Yoshiko Kogochi, Past Chairman. Children's Library Committee, Public Library Division, Japan Library Association.

資料　東京の児童図書館

3.4.1　館内利用
3.4.2　館外貸出
3.4.3　児童図書について
3.4.4　各種行事　おはなし会他
3.4.5　貸出文庫他
4　市立図書館と其事業児童関係記事一覧
5　おわりに

1　は　じ　め　に

今，私たちの周囲には子どもの読書のためのさまざまな動きが渦まいている。子ども文庫の活動，親子読書運動，子どもの本の研究，新聞雑誌などに見られる子どもの本の紹介や評論などが目につくようになってきた。それらの動きの中から子どもの読書普及に関して，地域住民の側からの自治体への働らきかけも各所に起ってきている。文庫活動に対する援助を求める声，児童図書館設置運動，児童奉仕の専門職員の要求などが自治体にぶつけられて，一定の成果をあげたところもある。そうした動きの中で児童図書館員の研究活動や住民との協力の姿勢もようやく固まってきており，図書館や自治体も否応なしに住民の声に耳をかたむけざるを得なくなってきている。勿論こうした動きが円滑に進展しているわけではなく，住民と図書館や自治体の間の摩擦，相剋は限りなくあり，その間にたつ良心的な図書館員たちの悩みも大きく深いものがある。日本の公共図書館が日本中のすべての子どもたちに，いつでも，どこでも，どんな子にもサービス出来るようになるのにはまだ程遠い。けれども道はようやく開けてきたといえるし，も早後戻りすることはあるまいと思う。なぜなら図書館員にも一般の人びとにも児童図書館の重要性が認識されてきたからである。

だがここに追いつくまでに何と長い時間がかかったことだろう。日本の公共図書館が児童奉仕をはじめたのは決して新しいことではない。「明治12年（1879）高知書籍館が〝6歳未満ノ者……館内ニ入ルヲ許サズ〟としているので6才以上の児童には公開していたと認められる」というのをはじまりとすればすでに92年を経たといえるし，本格的な児童奉仕を開始したと思える明治41年（1908）東京市立日比谷図書館児童室開設から数えても63年を経ているといえる。その間には実にさまざまな努力がなされさまざまな論争も行なわれた。にも拘わらず今になってやっと児童図書館への認識が定着し児童図書館発展への緒が開かれたといわなければならないのは一体どういうわけなのだろうか。

10数年前，私は〝図書館研究〟復刊3号に「〝東京市立図書館の児童室〟㈠日比谷図書館開設より関東大震災まで」という一文を書いた。そこで「〝市立図書館時代の東京の図書館の児童室はよくやっていた。今よりずっとすぐれた活動をしていた〟ということを時々耳にする。……何故戦後は〝児童室の活動は東京が一番だめだ〟といわれるようになったのだろう。嘗ての東京市立図書館児童室の伝統はどこえ消え去ったのであろうか。……たまたま東京市立図書館の歴史を知るのに都合のよい〝東京市立日比谷図書館一覧〟明治41年～大正7年と〝市立図書館と其事業〟大正10年～昭和13年とを見る機会を得た。そこでそれらの中から児童室関係の記事をひろいよみしてゆくうちに次のようなことを考えた。

第一に東京の，そして全国の児童図書館が戦後十年間ふるわなかった原因をさぐるために，第二に，日本の児童図書館の存在理由，発展の見とうし，活動の方法等をはっきりつかむために，日本の児童図書館史を調べることが大切なのではないか。……そして東京市立図書館児童室の歴史は日本の児童図書館史の一つの典型ではないだろうか。逆に云えば，東京市立図書館児童室の歴史を探ぐれば，日本の児童図書館史のごく大体がつかめるのでないだろうか」しかし日本児童図書館史を書く時間も能力もないから差しあたり前記二つの刊行物から児童室関係の記事を抜萃して資料として提供する。と云って標題どおり大正12年までの抜萃を発表したのであった。ところが〝図書館研究〟復刊は3号以後出されなかったので私は抜きがきだけはしたもののどこに発表するということもなくそのままにしていた。何かうしろめたさを感じながらも。

その後14年を経た今，児童図書館をめぐる状況は大きく変った。前記の文でも私は「昭和30年を頂点とする悪書追放運動以来，子供の読書と読書環境の問題への関心

が深まり，児童図書館活動がようやく重要視されるようにな」り「ようやく発展のいとぐちはつかめた」と書いているが，当時はいとぐちといってもチラとみえた程度で，それが現実的具体的な形をとって道が開かれてきたのは今日この頃の話である。この間の，戦後の児童図書館史も大切であり興味深いものがあるとは思うが，私としては〝東京市立図書館の児童室〟が尻きれとんぼになっていることが気がかりであり，戦前の東京市立京橋図書館に在職して幾分か実際を見聞してきたところでもあるのでこれを完結させたいと思う。完結といっても元の形を踏襲した抜萃の羅列では面白くないので（これも発表の必要があれば何かの機会に発表しておきたいが）多少整理し，いくつかの項目にわけ，東京市立図書館児童奉仕の変遷を記してみようと思う。幸いなことに，刊行物として前記のほか戦後に〝千代田図書館八十年史〟（昭和43年）〝東京都公立図書館略史1872～1968〟(1969)があるのでこれらにより補足しながら児童奉仕の足跡をたどってみよう。ただ〝東京市立図書館の〟と限定しても，全国の児童図書館の変遷，児童文学の動き，児童図書出版状況，児童の読書に対する考え方，それらの基底をなす児童観，などとの関連においてとらえなければならないとは思うもののまだ整理がつかないのでとりあえず資料を整理して提供することにしたい。

2　東京の児童図書館　その前史

明治20年（1887）—明治40年（1907）

東京における本格的な児童図書館活動の展開は，明治41年（1908）東京市立日比谷図書館児童室開設にはじまるといってよいと思う。しかしその前に二三の児童図書館活動が記録に残っているので一応前史として記しておきたい。

大日本教育会書籍館小学生部　明治20年（1887）開設　神田区一ツ橋

「わが国において組織的に，児童図書館を開いたものは，明治二十年（1887）に大日本教育会—後の帝国教育会—書籍館が，小学生部を設けてその蔵書を閲覧させたのが，文献に残っている最も早いものの一つということができよう。……しかし文献としては，ただ小学生部の図書館閲覧規則だけが残っているため，この小学生部あるいは児童部が断絶することなく継続したものか，それとも数次の移転に際して，あるいはその他の時期に，一時閉鎖されて空白の時代がなかったものか，それらのことはいま詳しく知ることはできない。〔その後〕明治四十四年にその一切を東京市に供託し，十二月東京市立神田簡易図書館として再出発した直後の文献によると……折しも日曜日で，十五六名の男児が，帽子を机の上に並べて，熱心におとぎ話や冒険談を読みふけっていたというし（註）また館長の話によると，平日は三・四十名，土曜と日曜には更に多数の男児が来館するということであった。（註—明治45年1月23日東京朝日新聞）」

以上は竹林熊彦〝児童図書館の史的研究〟（土　第29号昭和28・10）によるもので児童部に関する消息は大体これで尽きているようだが二三補足しておく。この書籍館は最初一橋にあり明治22年柳原河岸に移転，明治24年一橋に新築落成して戻る。菅忠道〝日本の児童文学〟によると「書庫落成式における東京図書館の田中稲城の演説が〝学校外ノ教育〟と題して〝大日本教育会雑誌〟(明治二十四年十二月）に掲載されているが，児童の読書生活に言及して，つぎのような指摘がある。

〝学校外教育ニ於テ大ニ教育家ノ注意ヲ乞ワントスル者アリ，所謂感動小説（センセーショナル・ノーベル）ノ流行是ナリ，凡ソ此類ノ小説ハ少年ヲ誤リ，極メテ弊害多キ者タルハ，今更申ス迄モナシ，抑々少年ノ習得スル者ハ，皆学校ノ課業ヨリ習得スルト思ウハ，大ナル誤ニテ，子守歌昔話ヨリ草双紙小説等，児童ガ閑暇ノ時誦読スルモノニテ，其影響却テ学課ヨリモ勢力アル者アリ，……是ニ由テ之ヲ観レバ，書籍ノ良否ヲ瓶別シテ，少年ノ読書ヲ監督スルハ，教育上ノ一大要務ト謂フベシ〟

当時としては卓見であり，こういう観点からも新しい少年文学の誕生は望まれていたわけであるが，これが教育界の大きな問題意識となるまでには，明治末年まで待たねばならなかったと」記されている。

学課以外の少年書類の重要性を強調したところは卓見であろうが，「良否ヲ瓶別シテ少年ノ読書ヲ監督スルハ，教育上ノ一大要務」とつづけていることに注意する必要があろう。この演説からみると，この時点では，即ち一橋に移転した当時は小学生部が存在したと思われる。

この書籍館は通俗図書館として発足し明治22年，東京図書館から通俗図書を大幅に借受け充実させたが，後にボアソナード文庫（法律）遠山文庫（医学）仏教図書館等を包含して多分に参考図書館の様相をこくする。明治28年，東京図書館に通俗図書を返し，29年，帝国教育会書籍館，40年，私立教育図書館と改称し，42年には帝国教育会会員以外の一般公衆の閲覧休止をしている。従って明治44年11月，東京市立神田簡易図書館に委託したと

きには小学生部はなかったと思われる。

この図書館が東京市に委託された理由は，「……維持がなかなか困難であったようで維持委員会を設けたり，或は更に辻文庫を附設したり，後には市参事会へ申出て補助を受けると言った事もありましたようです」（二十年前に於ける我が国図書館事業を観て　伊東平蔵〝市立図書館と其事業〟第48号　昭和３年９月）という訳で経営不振となったらしい。

★大橋図書館　明治35年（1902）開設

明治23年，博文館を創業した大橋佐平氏は22年，〝日本の少年〟をはじめとして〝幼年雑誌〟〝少年世界〟〝幼年世界〟〝少女世界〟などを発行し，図書では24年〝こがね丸〟を筆頭に〝少年文学〟32冊を刊行して成功を収めた。そして明治26年，欧米の出版事業視察のために出かけたがその時，欧米各地に図書館が設けられ学校と共に国民教育上重要な地位を占めていることを知り，帰国後，図書館を設立して社会に寄与することを決意し，その死後完成したのが大橋図書館である。

明治35年６月15日，博文館創業15周年記念日に開館式を行なったが，当初の規則をみると〝第二条　何人ニテモ満十二才以上ノ者ハ本館ニ来リテ図書ノ閲覧ヲナスコトヲ得〟とある。当時一般に図書館入館が15才以上であったとすれば，12才以上ならば児童奉仕といえるのだろう。但，設計図に児童室はない。

明治36年には奨学閲覧券というものを出している。これは「東京市十五区内小学校尋常科五年以上の児童にして成績優秀なる者の推薦を校長に依頼して贈呈し後には東京府立各高等女学校及其他にも及ぼし明治三十七年度には，高等小学校九十一校に六百十八枚，女学校十八校に二百三十一枚を贈呈し此規定は大正十二年の大震災まで継続した」（〝大橋図書館四十年史〟　昭和17年）という。

明治43年には〝少年図書目録〟を刊行。関東大震災で焼失した後，大正15年，新築落成するとその第１階には，事務室，応接室，宿直室，新聞雑誌室，館外貸出図書陳列室と共に児童室が設けられた。この時，入館制限もゆるめられているのではないかと思うけれど規則の改正の記事はないので解らない。

年表をみると，昭和２年９月児童閲覧室を閉鎖し婦人閲覧室にしているが，昭和５年11月に地階に児童閲覧室を復活している。昭和15年11月には，「第三回読書奉仕週間ニ際シ社会事業団体ニ対スル児童文庫館外無料貸出制度ノ創設」という記事がみえる。これについて本文〝復興以後現在まで〟の章に「……館外に関しては個人貸出と貸出文庫の制を設け，個人貸出は更に大人と児童とに別ち，児童は国民学校尋常科五年以上の者に対して無料で貸出している。貸出文庫は現在では社会事業団体にして児童図書館又は幼稚園を経営するものに限り無料を以て供給しているが，これも将来は更に発展せしめたい考へである。」と記されている。個人貸出がいつからはじまったかは明らかでない。

いずれにしても開館当初から児童奉仕については考慮が払われていたように思われるし，大橋図書館はすぐれた児童奉仕をしていたといわれている。以前に東京市立図書館に在職してその館報〝市立図書館と其事業〟に児童関係の評論を度々書かれた竹内善作氏が，昭和３年より大橋図書館に勤務され，小学生時代，日比谷図書館児童室利用者で後に児童文学に携り童話や詩の作品のある柴野民三氏が児童室を担当されたことがあるのなど，大いに関係あることと思う。大橋図書館の児童奉仕については別に調べる必要があろう。

この図書館は戦災は免れたが昭和28年，長く輝いた歴史を閉じて閉館された。その蔵書は現在，港区芝公園内三康文化研究所附属三康図書館にあって一般に公開されている。そのうち児童図書3,400余部，5,200余冊，30余誌の目録が印刷刊行されている。明治期の貴重な図書もあるが，これは元大橋図書館員であった小谷源三氏の話によると，同館は関東大震災で一切焼失したがその後，博文館発行の児童図書は買い集め資料として保存されたものであるという。

★竹貫少年図書館　明治39年（1906）

これは東京府下千駄ヵ谷穏田の竹貫佳水私宅で開かれたもので今日の家庭文庫である。

竹貫佳水　明治８～大正12（1876）～（1923）本名直次直人と号す。群馬県生，攻玉社出身，児童文学作家として〝少女四季物語〟〝気紛れ少年〟〝少年軍使〟他多数作品あり，少年世界の編集にもたずさわる。後に日比谷図書館嘱託となり，日比谷図書館頭今沢滋海共著〝児童図書館の研究〟（大正７，1918）今沢滋海共選〝児童用図書目録〟（大正８，1919）の労作がある。

少年図書館に関しては　仙田正雄「楢の落葉―図書館関係雑文集―」（昭和43，1968）に詳しいので引用させていただく。

「明治三十八年（一九〇五）頃には東京府下千駄ヵ谷穏田四番地に居をかまえて，慈善事業として育児園を興

し，傍らその副事業として，明治三十九年（一九〇六）十月七日その自邸で始めて少年図書館を開いた。……

その少年図書館の開館当時の新聞（国民新聞明治三九，一〇，九）は次のように伝えて，当時の児童に対する図書館奉仕の一端を説明している。

〝予記の如く少年図書館は七日午前十時……竹貫邸に於て其第一回を開会せり。市内の各小学校生徒及び府下幼少年男女等遠きは鶴見辺より腰弁当にて来会し入替り立替り一々入館者所属の学校及び姓名を記さるべく帳簿を作られ，各自が愛らしき筆もて認めし者無量七十名，館内は八畳六畳二間より成り此広間の左右に書棚を造られ，名々勝手に之を閲覧するべく閲覧書式等を認むる煩もなく児童には最も適切なる図書館といふ可く，「ゑんりよなく取て御覧なさい」「便所はここですよ」式の貼札は何処までも小児式で館主佳水氏は，例月第一日曜日を以て開会となす可き挨拶をなし武田桜桃巌谷小波氏等のお伽噺あり其間々に蓄音機を狭みて変化よく小児を遊ばせ撮影等ありて散会したり〟。」

というよにほほえましい場面が描かれている。この人について〝楢の落葉〟は次のように紹介している。

「〝攻玉社に土木工学を修めて東京瓦斯会社に入り，米国に渡りてアラスカ地方の製缶所にあったが，帰朝の後「少年世界」の編輯に入り，生涯を斯道に捧げて功を完うした〟人で，米州社会生活を具さに見学経験してきたらしい識見と，持前の児童愛が社会事業への大きな関心と興味を触発したのではないかと思われる」「註〝　〟内は改訂増補少年文学史　木村小舟　明治篇下巻23頁

そしてこの図書館は，明治41年　東京市立日比谷図書館児童室が開設される時，全部譲渡されてしまうのである。その理由が帝国教育会の図書館同様経営困難となったのか，或はこうした施設は自治体が経営すべきものと考えられたのか解らないが，この貴重な経験はその後の東京市立図書館の児童奉仕にうけつがれたものと思われる。

3　東京市立図書館の児童奉仕

明治41年（1928）—昭和20年（1945）

3.1　日比谷図書館開館まで

大日本教育会書籍館，大橋図書館，竹貫少年図書館とその前史はすべて私立図書館の児童奉仕によって飾られた東京市の児童図書館も明治41年，東京市立日比谷図書館児童室開設と，その後の各市立図書館の児童奉仕によってようやく本格的な展開がはじまる。ここに直接児童図書館との関係はないが，日比谷図書館開設までの経緯の中に，当時の図書館観を示す興味深い資料があるので附記しておきたい。

明治33年，東京市教育会が創設され，教育会は学校教育だけでなく図書館についても調査することになり，委員会を設け〝図書館設置の方法（案）〟をこしらえた。翌34年に会長星亨暗殺のことなどあったが図書館調査は続行されることとなり，明治35年，江原素六会長の名で通俗図書館設立建議が市長に提出された。それをみると「抑国民の品性は上流貴族に於て知るべからす，正に以て一般人民に徴すべきのみ，然るに我国現下の状態を洞観すれは，其文明は単に皮想的として未だ以て真正の文明国と称するに足らず，其の下層の労働者の如きに至りては常識の欠乏，迷信の旺盛容易に矯正すべからざるものあり，是れ蓋し無教育の致す所なり，……而して国民品性の代表者は上流紳士にあらずして，下層践民にあるを知らば，専門学者の輩出固より賀すべしと雖も国民全体の智能徳器を啓発し，之に常識を授け，常道を教ふること豈最大急務にあらずや，而も此急務を救ふもの通俗図書館を惜いて何ぞや。然るに本市の如き首都として一二図書館の外，通俗教育の為にする是等事業の経営に関し，殆んど何等の施設する所あるを聞かざるは実に一大痛根事にあらずや既に其の名を通俗と云ふ，主として下層社会の通俗的知識の普及に資するにあり，何ぞ古典珍本を蒐蔵するの要を見ん，唯最も普通なる尤も実益ある書を蒐集し，何人も何等繁褥なる手続を経ずして出入し得るの便利を共し其学生たり職工たり，労働者たり其階級長幼の如何を問わず，恰かも我書庫に入るが如く簡にして別に閲覧料を徴することなく観覧を許したらんには，何人も容易に入り得るを以て読書の良習慣を養成して無益の遊戯を避けしめ，品性の修養に資して高尚なる精神的快味を感ぜしめ，一方に於ては普通教育をして益々完備ならしめ，其に社会に貢献する所又実に多大なるものあるは，論を俟たざるなり。」（〝東京教育時報〟第27号　明治26年）

ついで明治38年，市教育課の下で作成された〝市設図書館建設方針〟によると

目的　普通近易ノ図書ヲ蒐集シテ中等以下ノ教育アル者ヲ収容スルコト

市ノ沿革又ハ市ノ文物精華ヲ窺知スルニ足ル図書ヲ蒐集スルコト

……図書・敷地・建物等略……

閲覧人　開館ヨリ三年間ハ内輪ニ見積リ一日平均三百

五拾人一年間拾壱万弐千人

閲覧料　収入セザルヲ原則トス然レドモ収入スルトセバ各種閲覧人ヲ通シテ一人ノ料金平均弐銭ヲ超過スベカラス但此金額弐千弐百四拾円

（市立図書館と其事業　第48号　昭和3・11）ということになる。

これより少し先，明治35年〝東京教育時報〟35号所載坪谷善四郎〝東京市立図書館論〟は「(1) 図書館の必要」として，高等専門の学科を研究する学生のため，一般の読書家のため，調査研究のためと3つの理由をあげ最後に，閑居して不善をなすような小人は暇をもてあまして「終に酒食に耽り，賭博を弄し，風俗を壊り道徳を損するに至るもの」が限りなくある。これは高尚有益な娯楽を知らないからだ。もし読書する機関をつくり暇があれば読書できるようにしてやればこんな悪風を正すことができる。これには図書館をたてる外ない。「図書館の効益この如く大なり」と述べ，「(3) 設立及び維持の方法」で閲覧料の計算をしている。即ち「現在の各国図書館の経費に徴すれば，維持費はこの如くにして年額六千円あらば必ずしも不足ならざる可し。若しそれぞれ個々の図書購入費及び製本費の如きは日々の閲覧料を以てこれに充つるを得ん。惟うにこの館は夜間にも開場すとせば，少くも日々に五百人を容す可く一人普通に三銭を徴収すとせば，毎日十五円を得るべきもその内割引券若しくは無料縦覧券を携うる者あるを予算し，一日の収入十二円と仮定せば毎月三百六十円の収入あるべし。しからば一カ年間約四千二三百円の閲覧料を得るべきが故にこれを以て図書購入費に宛て新刊書中弥や閲覧者の減じたるものは漸次に払下げて書庫内の充溢を避けることとせば庶幾くは新刊書を購求し得て遺憾無からん。」といっている。（〝東京市教育時報〟所載のものは〝五十年紀要〟より引用）

これらを綜合してみるといろいろなことが考えさせられる。

公立図書館設置の理由として，無教育のため常識が欠乏し，迷信が旺盛である下層の労働者，下層賤民に対し智能徳器を啓発し，常識を授け，常道を教えることや，酒食に耽り，賭博を弄し風俗を壊り道徳を損なう者に高尚な娯楽を与えることが力説されていることはその後の図書館行政のあり方を示唆しているといえる。しかもその姿勢は姿をかえていまだに残っているといえないだろうか。それが現在図書館をめぐってもり上っている市民運動との摩擦をひきおこしているように思われる。

閲覧料については，折角建議では，面倒な手続をとらず無料にすれば誰でも入れるといっておきながら，実現の段階では後退して有料となり，その後日比谷だけでなく深川他数館が有料となってしまう。そのため戦後20数年を経た今日尚図書館に来て，料金はいくらですか，という人がいて図書館員を嘆かせる結果となったのである。

こうして日比谷図書館が開設されると次々と市立図書館が開設されていくのだが，その中にあって図書館設置のための住民の運動が全然なかったかというとそうでもない。

「南品川においては大正九年（1920）頃から町立城南尋常高等小学校の卒業生有志と高等科在学生が中心となって，町の図書館を設立する運動を起し，その経費をつくるため竹筒を利用した貯金箱で，零細な募金を開始した。」（〝品川区立図書館事業年報〟昭和41）これがきっかけとなって南品川に荏川町文庫（大正11）ができ，後に品川図書館となり，昭和7年，東京市に寄附されて東京市立品川図書館となる，という経過を辿った。こうした例は他にもあるかもしれないが，京都市における私立修道文庫（明治38年開設，我国の独立した児童図書館の最初のものと推測される）が，修道小学校同窓生の手でつくられたことと思いあわせて興味深い。修道文庫については前掲の〝楢の落葉〟に詳しいが，本稿の範囲外のことなので割愛する。

3.2　東京市立図書館設置状況とその変遷

戦前28館を数えた東京市立図書館の設立の順序とその変遷を概観してみると，明治41年日比谷図書館が児童室をもって開館された当初は児童も含めて有料であった。次の明治42年，深川図書館開館児童室をもっており，ここも最初有料であった。その後，明治45年までに各区に小学校内附設の簡易図書館が15館となり全部無料，児童コーナーをもち児童奉仕をしていた。大正2年には簡易の二字を省きすべて東京市立丶丶図書館となり，更に3館増加して大正10年には全部で20館となった。が，大正12年関東大災震のため大半が焼失し，全部が新築復興するのに昭和11年までかかっている。更に昭和7年東京市の市域拡大に伴い館数をふやし，昭和13年までに全体で28館となった。そのすべてが多かれ少なかれ児童奉仕をしていたことはとも角誇りとしてよいであろう。

この設置状況とその変遷は箇別にかくと大変わかりにくいので，一応次のような表にまとめてみた。

東京市立図書館設置状況と変遷

設立順	設立年	図書館名(東京市立を省略)	独立附設	大正2年館名変更	大正12震災被害	復興開館年と設置状況	閲覧料	昭和20戦災	備考
1	明治41	日比谷図書館	独立	ナシ	破損		有料大正4.児童ノミ無料	5.25全焼	昭和18年都政実施により全館東京都立図書館となる。
2	〃42	深川〃	〃	ナシ	焼失	昭3・独立館	当初有料・大4.無料 昭3・有料・児童無料	小破	
3	〃	牛込簡易〃	小学校内	牛込図書館		市ケ谷小	無料	小破	
4	〃	日本橋〃	〃	日本橋〃	焼失	昭4・城東小	〃		
5	〃43	小石川〃	〃	小石川〃		昭3・富町小	〃	小破	
6	〃	本郷〃	〃	本郷〃		昭8・本郷高小	〃	小破	
7	〃	浅草〃	〃	浅草〃	焼失	昭11・独立館	当初無料 昭9・有料児童無料	3.10全焼	
8	〃	京橋〃	〃	京橋〃	〃	昭4・〃	昭4.〃〃		
9	〃44	下谷台南〃	〃	台南〃(昭5・下谷図書館)	〃	大15・御徒町小	無料	5.26半焼	
10	〃	神田第一〃	帝国教育会内	一橋〃(昭4・駿河台図書館)	〃	昭5・独立館	当初無料 昭4有料児童無料		
11	〃	芝〃	小学校内	三田〃		御田高小	無料	5.25全焼	
12	〃	麻布〃	〃	麻布〃	破損	昭6・南山小独立館舎	〃	小破	
13	〃	四谷〃	〃	四谷〃		昭7・四谷第二小	〃	小破	
14	〃	本所〃	〃	本所〃	焼失	昭11・独立館	〃	3.10全焼	
15	〃45	神田第二〃	〃	外神田〃	〃	昭3・芳林小	〃	小破	
16	〃	京橋第二〃	〃	月島〃	〃	昭3・月島第二小	〃		
17	〃	赤坂〃	〃	氷川〃	破損	昭5・氷川小	〃	小破	
18	大正3	両国図書館	〃	ナシ	焼失	昭5・千代田小	当初無料 昭9.有料児童無料	3.10全焼	
19	〃	中和〃	〃	ナシ(昭5.東駒形図書館)	〃	昭5・明徳小	無料	3.10全焼	
20	〃10	麹町〃	〃	〃	焼失	昭2・麹町小	〃	5.25全焼	
21	昭和7	渋谷〃	(大.11.渋谷町立図書館を移管)				〃	5.25全焼	
22	〃	寺島〃	(昭.4.寺島町立〃〃)				〃	5.25全焼	
23	〃	西巣鴨〃	(時習小学校文庫〃〃)				〃	4.14全焼	
24	〃	中野〃	(昭.6.中野町立図書館〃〃)				〃	5.25全焼	
25	〃	品川〃	(大.10.荏川町文庫 当時財団法人品川図書館寄附)				有料 児童無料	小破	
26	〃9	淀橋〃					〃〃	5.25全焼	
27	〃13	王子〃					〃〃	小破	
28	〃	荒川〃					〃〃	小破	

3.3　組織・職制・規程の変遷

組織・職制・規程の変遷が児童奉仕とどんな関連をもったか明らかでない面もあるが，私自身が市立図書館に在職中経験した事件は若干これに関係があると思われるので簡単に述べておこう。組織等については，〝五十年紀要〟と〝東京都公立図書館略史〟〝市立図書館と其事業〟〝千代田図書館八十年史〟に記載されたものを整理要約してみると次のようになる。

(1)明治41～45年　日比谷図書館長に主事，その下に5係（目録，蔵書，出納，会計，庶務）をおき各係に主任をおいた。深川図書館は首席事務員で事務分掌は日比谷と同じ。簡易図書館は事務員か嘱託を主幹に任じて監督させ，庶務，図書，閲覧の3係をおき，主幹は所在の小学校長をあてた。

尚，当時の閲覧料金は次のとうり。

日比谷	特別閲覧人	1回4銭	15回36銭
	普通	〃 2銭	〃 18銭
	児童	1回1銭	15回 9銭
	新聞雑誌室	〃 〃	〃 〃
	席出閲覧人	甲種4円（1年）	
		乙種2円（5ケ月）	
		丙種1円（1ケ月）	
深　川	普通閲覧人	1回1銭	
	設童	〃 1銭	15回　9銭

(2)大正2年　日比谷及深川の館長を主幹とし，主幹は「市長ノ指揮監督ヲ受ケ館務ヲ掌握シ所属吏員ヲ総督ス」となり職員は主事，主事補，事務員，雇員，嘱託。簡易図書館は従来どうり。簡易図書館の簡易が削除された。尚，従来各館別であった規程を併合統一して東京市立図書館館則・閲覧・帯出規程が作られた。深川図書館は帯出をはじめ，日比谷図書館は児童の帯出をはじめた。

(3)大正4年3月　ここで画期的な組織の変更が行われて事実上の中央図書館制度が実施されることとなった。こうした変更の理由の一つは，各図書館が独立に運営され，全体としての統一もなく連絡を欠いているので，統一連絡を計ったこと，二つには当時の東京市の財政緊縮政策に沿って合理化を行うためであった。そこで「日比谷図書館に館頭を」「他の図書館に主任」「学校内図書館に監事」をおくことになり，「館頭は市長の命を受け」「主任は館頭の命を受けて所属事務を処理」「監事は館頭を補佐して所属図書館の事務を監査」することとされた。この時日比谷・深川の児童室は無料となる。

この改正によって，図書及物品購入，配布，目録等の主要作業は日比谷に集中し，「諸他館員は出納事務及図書利用法の研究に専念し得るに至」り「その最も顕著な効果は図書選択法の改良に伴ふ良書の供給，及び同盟貸付，印刷カードの調整，その他館員会合の機会を多くし」事務打合せ，相互の研究討議の便が計られた。だが「経費の節減も行はれ……監事を除く爾余の嘱託員を殆んど解嘱し，尚ほ若干の館員をも淘汰減員」したことも忘れてならないだろう。

ここで大正12年頃の休館日，開館時間を記しておこう。

閲覧時間

日比谷・深川	4月～9月	午前8時	―午後9時
―　橋・京橋	10月～3月	〃 9時	― 〃 9時
学校内図書館	平　　日	午後3時半	― 〃 9時
	日曜・祭日	午前10時	― 〃 5時

定期休館日

毎月14日	大掃除日
2月11日	紀元節
8月31日	天長節
10月1日	東京市自治記念日
10月31日	天長節祝日

8・9・10月中5乃至10日間　曝書期

自12月27日至1月5日　年末年始休館

その後，天長節が変ったり，館数がふえると館内掃除日が2日間にわけられたり，館によっては開館時間の変更があったりするが，基本的にはこの線で継続されていた。児童室は，平日午後1時，日曜・祭日　午前10時から5時までであった。

館員の勤務時間は，大正13年7月

4月1日～7月20日　午前8時―午後4時土曜正午まで
7月21日～8月30日　午前8時―正午まで
9月1日～10月31日　午前8時―午後4時
11月1日～3月31日　午前9時―午後4時土曜正午まで

以上が東京市の執務時間で図書館もこれに準じたが，「閲覧係員その他現業に従事するものは，土曜も半休することを得ず，日曜祭日でも休暇をとることが出来ず，何等従前と異るところがない。」（市立図書館と其事業第23号　大正13・10）閲覧係は大多数が中学又は大学に通う学生で出納手といった。午前番，午後番の交替制で多分3時頃交替していたと思う。閲覧係でなく上記の執務時間によるものも休暇は代休制であった。

有給休暇は

1．市吏員雇員及傭員に準ずる者は

7月21日—8月31日までに事務に差支ない限り20日以内

2.事務の都合で休めなかったもの，又は休暇日数が15日に達しなかっものは

イ，休暇し得なかった者　10日以内

ロ，5日以内休暇した者　7日以内

10日以内　〃　5日〃

11日以上　〃　3日〃

3.給仕，小使その他傭人規程によらない傭人は

7月21日—8月31日まで　4日以内

9月1日—7月20日まで　2日以内

というようなことになっている。週休制や有給休暇については現在の方が有利であるが，勤務時間は戦前の方が短かかった。これは戦後，占領軍の命令で現在のようになったと思うのだが。

(4)昭和6年4月　中央図書館制度の功罪はここではふれないが，日比谷図書館を中心に東京市立図書館は東京市教育局内でも学務課，社会教育課，視学課と並んで課に相当する位置を占めていた。図書館業務の内容も改善され奉仕も活発に行われ，専門的職員も確保されていた。ところが昭和6年4月に至って，今沢館頭は退職，処務規程が改正されて「日比谷，駿河台・京橋及ビ深川ノ各図書館ニ館長ヲ置キ，其ノ他ノ図書館ニ主任ヲ置キ，学校内設置ノ図書館ニ，更ニ監事ヲ置ク」「館長及其ノ他ノ職員ハ教育局社会教育課員中ヨリ，教育局長之ヲ補任又ハ補属セシム。監事ハ本市立小学校長ノ中ヨリ之ヲ嘱託ス」ということになり，市と図書館との連絡は社会教育課図書館掛が行うこととなった。

昭和8年，図書館令改正により全国的にはこの時から中央図書館制度が行われるが，東京市においては，昭和17年に図書館令による中央図書館制度が実施されるまで前述の体系が維持された。

私が経験した事件はこの期間に起る。昭和12年，私が京橋図書館に勤務していたときのことである。その年6月2～10日まで満洲国各地で第31回全国図書館大会が開かれて，館長は出張参加されることになった。私は姉夫婦が大連におり，義兄が大会開催の各地（奉天，新京，ハルピン）の知人に私の宿を依頼してくれたので私費で参加することにした。管外旅行願をだしたか，休暇願だけであったか記憶しないが，館長と庶務主任の了解を得，庶務主任は社会教育課の某氏の了解をとりつけたということで安心して出発した。旅行中の思い出といっては大陸の広漠たる風物だけで大会で何が議されたのやら覚えてもいない。ハルピンで大会が終了開散すると，熱河まわりと朝鮮まわりの帰途コースがあったが私は再び大連に戻り船で帰国した。

帰ると図書館に出勤して同僚たちに旅行の話などしていると6月24日教育局によびだされ図書館掛長にあった。すると掛長は「君は無断で館長と一緒に満洲へいったそうだな。これは役人の体面を汚す行為だ。辞表をだせ。」といわれてあんまり思いがけないことで驚いた。一方，同じ日に館長も庶務主任もよびだされ，館長は「部下の女をつれて満洲へいった」というようなことをいわれたという。

いろいろやりとりのあった末，私は掛長に「無断でといわれるが私は自分の直接の上司である人の許可を得ていっている。満洲では館長と碌に話もしなかったし宿も全然別であったから不審なら誰にでも聞いてほしい。辞表をだす理由はない。」といって帰った。労働組合も何もないときだから，それなりの運動をしてクビになることはなかったが，館長は即時駿河台図書館に，続いて庶務主任は深川図書館，私は氷川図書館にと配転された。今にして考えると，何でも手続きのやかましい役所のことだから手続上の手落ちはあったのかもしれないと思う。しかし何も調べもしないでいきなり「役人の体面を汚す行為をしたから辞表をだせ」などという乱暴なことをどうしていわれたのだろう。今考えても腹のたつことだし，誰がいいだしたのか解らないが実に下劣な推測だと思う。

このことの影には，すぐれた図書館専門家ではあるが，一本気で常時野党的立場にたっていた館長に対する，純然たる役人根性の図書館掛の上司や同僚の反感があったのではないかという気がする。それにしても，専門家の館頭を中心としたかつての中央図書館制度の下にあれば，こんな下らない事件は起らなかったのではないか。社会教育課図書館掛の下に統制されるような組織のあり方がこんな事件をひき起したのではないだろうかと考える訳である。

このことのとばっちりをうけて大切な仕事が一つ終止符をうつことになった。

正確な日時は解らないが，多分昭和12年1月頃〝子供の教養〟という雑誌を発行していた武南高志氏の発案で，〝児童読物研究会〟というのができて京橋図書館で毎月1回開かれていた。参加者は沖野岩三郎，村岡花子，小出正吾，渋沢青花等の諸氏と図書館側からは館長の他私や2.3人の館員であった。そこで検討された推薦図書は〝子供の教養〟に掲載されていた。この研究会は大体6

月頃まで開かれていたが，館長の異動と共に開催不能となって自然消滅となってしまった。

ところが丁度同じ頃，教育局長を会長とする官製の東京市児童読物研究会（後に調査会）が設立されて，その方はずっと継続されるのであるがこれは後に述べる。

まことに私にとって昭和12年は記念すべき年であったが，日本国もこの7月，日中戦争がはじまって，やがてそれが太平洋戦争に拡大し，敗戦へとおちこんでいく端緒を開いた年であった。

3.4　児童奉仕

3.4.1　館内利用

「〝開館后ノ景況ハ頗ル良好ニシテ満員ノ為ニ閲覧ヲ謝絶スルコト頻繁ナルノミナラズ殊ニ児童閲覧室ノ如キハ土曜日曜祭日等ニアリテハ定員ノ数倍乃至数十倍ノ人員ヲ収容セザルベカラザルノ盛況ヲ呈シツツアリサレドモ同室ノ設備狭隘ナルヲ以テ目下応急ノ策トシテ時々雑誌閲覧人ヲ休憩室ニ於テ閲覧セシメ新聞閲覧室トシテ之ニ児童ヲ収容シツツアリ〟」（〝東京市立日比谷図書館一覧〟明治41～42年）といった状態であったが

東京市立日比谷図書館規則

第一条　本館ハ市民ノ為ニ図書ヲ蒐集シ公衆ノ閲覧ニ供スルヲ以テ目的トスル

……

第四条　七才未満ノ児童ニ対シテハ図書ノ閲覧ヲ許サズ

とあるように幼児ははいれなかったようである。これは大正4年，前述のように改正統一された〝東京市立図書館館則〟〝閲覧規程〟にはみえないのでこのときこの制限は外されたのであろう。図書館雑誌16号(大正12.3)をみると〝児童の図書館〟（今沢滋海）の中に次の一節がある。

「(四) 絵本の手段に依て幼少なる児童を誘導すること。

児童をして図書館の利益を享けしむるには，先づ図書館に通ふ習慣を養ふ必要がある。仮令，本が読めなくとも，来たい者には来さすがよい。否，来るやうに導く可きである。故に兄姉に伴はれて遊びがてらに見舞ふ，本の読めない，極幼い児童に対しては，絵本の如きものを備付る必要がある。……

この事実は，同時に児童登館年令の規程を自然と弛めて居る。」

こうした考え方と規程の下に大正3年で19館を数えた市立図書館はすべて小学生に対する図書館奉仕をしていたのである。

ではどの位の利用者があったかをみよう。当時は児童の館内閲覧にも閲覧票を用いていたので入館者の男女別は毎日集計していた。日比谷図書館の開館した明治41年11月21日から12月末までの統計をみると

		特別	普通	新聞雑誌	児童	優待	無料	合　計
人員	男	1,591	11,446	2,915	3,945	33	9	19,939
	女	30	309	14	753	—	—	1,1.6
	計	1,621	11,755	2,929	4,698	33	9	21,645
一日平均		46.3	335.9	83.7	134.2	0.9	0.3	601.3

となり児童は全体の22%程である。開館でどっと押しよせたのが落ちつくと翌年は児童閲覧者の一日平均86.4名，実数男22,324名女6,439名計28,763名となりその後増減はあるが大体この程度を上下している。

少し煩わしいが大正11年，20館がでそろった時期の児童利用者の各館別の統計もみてみよう。

館　名	児童館内	同館外
日比谷	23,924	6,726
麹町	8,991	1,852
一橋	31,330	20,957
外神田	10,968	
日本橋	5,990	
両国	13,232	
京橋	16,535	4,180
月島	18,644	
三田	12,309	4,199
麻布	7,509	2,741
氷川	12,550	8,181
四谷	2,965	1,289
牛込	7,022	
小石川	9,225	114
本郷	13,599	6,308
台南	19,165	1,553
浅草	12,885	2,025
本所	9,372	
中和	16,063	6,276
深川	28,074	
計	280,349	66,348

（大正11年1月～12月）（〝市立図書館と其事業〟第15号　大正12.8）

これでみると全20館が児童の館内閲覧はしていたこと

がわかる。貸出はやっていないところもあるが。閲覧統計は昭和13年の分まで〝市立図書館と其事業〟に時どきでているが，昭和13年8月同誌巻頭論文「図書館精神の昂揚について」（社会教育課長　斎藤助昇）によると，「今最近三ケ年間に於ける本市々立図書館の閲覧状況を見るに

昭和10年度	2,184,158 人
昭和11年度	2,077,488 人
昭和12年度	1,987,020 人

であり，其数字の示す如く逐年逓減の一途を辿り，毎年平均約十万人の激減を来たし……」といって責任を感じているが，児童に関しては昭和12年までは減っていないでむしろ増加している。昭和13年になって減少の方向をみせているが，この館報はこの翌年で廃刊となっているのでその後のことは解らない。

閲覧料金については既に述べたように，日比谷図書館開館時には1回1銭徴収していたが大正4年廃止して無料として以来，各館とも無料であった。館外貸出も勿論無料である。

3.4.2　館外貸出

貸出は大正2年8月よりはじめられ，児童及父兄に対し「簡易ニシテ而モ教育的ナル方法ヲ以テ，児童用図書ノ館外帯出ヲ始メシニ其成績以外ニ良好ナリ」（〝東京市立図書館一覧〟自大正四年至大正五年）とある。年令は制限があり，尋常小学校5年から高等小学校2年までが一般的であった。私のいた京橋図書館では4年から貸していたようにも記憶している。低学年は借りた本についての責任がもてないというのが理由であったと思う。貸出方式はさまざまで各館それぞれ工夫をこらしていたようである。〝市立図書館と其事業〟（第2号）に日比谷図書館の貸出方式について述べてあるところを引用して参考にしたい。

「お宅で本を読みたい方は御覧下さい。

1.児童帯出券は尋常小学校の五年生から，高等小学校の二年生までの方で，図書館の規則をよくお守りなさる方に差上げます。

1.帯出券を差上げる前に図書館から，保証書をお渡ししますから，それに保証者の御印をいただいて来て下さい。

1.児童帯出券をお持ちの方は，一冊の書物を一週間お宅へ借りて行くことが出来ます。

書物は児童帯出券をもってゐないとお宅へ借りて帰る訳にゆきません

書物を御宅へ借りておいでに

なりたい人は次の約束をお守り下さい

1.書物は約束の日までに屹度返して下さい

1.書物を又貸しすることは固くお断りします

1.書物は汚れた手で持ってはいけません

1.落書をする者には書物を貸しません

1.栞の代りに紙を折ると，そこから千切れますから御注意下さい

1.書物は屹度風呂敷か，何かに包むでお持ち下さい。

以上の――雑誌の棚の上に並ぶ二枚の美麗なポスターの記載に会得が出来た子供は，燃え立つ読書慾に頬を染めて係員の周囲に集る。」

つづいて貸出方法の説明が書かれているのによると，本にはブックカードとブックポケット，利用者には帯出証票とその袋を渡す。貸出す時は，ブックカード・貸出証票・その袋の三つに返却日付をおし，帯出証票をブックポケットに，ブックカードは袋に入れて保存する，ということになっている。そして「此帯出方法は旧カード式に較べて三倍，記帳式に比し十数倍の速さで整理される」とあるのでこの頃改善したものであろう。

3.4.3　児童図書について

(イ)　児童図書目録

児童室の利用人員については前述のとうりであるが，その蔵書構成，よく読まれた本などについては「市立図書館と其事業」に次のようなものが掲載されている。

1.日比谷図書館児童図書分類目録　大正9年以後の購入図書約1,890冊　秋季特別号　大正11年10月

2.同上　改訂版　約2,350冊　春季特別号　大正13年10月

3.児童用図書百種　日比谷図書館選　大正11年9月現在の「本館蔵書中児童の特に耽読するもの約五百余種に就いて，優秀にして且賞品若くは贈答用として適切と認むべきもの」を選択　（第11号　大正13·11」

4.児童用図書百卅種　日比谷図書館選　大正12年2月現在同上，（第24号　大正13・11）

5.児童読物九十五種　日比谷図書館選　大正14年7月～15年8月に出版されたもの「児童の好むで閲覧した物の中から選択」（第38号　大正15・8）

6.図書館週間選定児童読物　日比谷図書館選　解題付43冊（第48号　昭和3年11月）

7.児童読物五十種　日比谷図書館選（第58号　昭和5・

11)

8.推奨児童図書　79種　日比谷図書館選　(第63号　昭和7・11)

9.図書館週間中に読まれた推薦児童図書閲覧順位表　日比谷図書館　(第69号　昭和12・2)

上記の(1)(2)は購入図書目録，(3)〜(8)は選定乃至推薦図書目録。(9)は推薦図書の順位表。この他に大正13年より「児童読物」という小冊子を毎年刊行，昭和13年まで続いたようであるが明確なことは解らない。

次によく読まれた図書については，大正10年下半期より半年毎の調査が掲載され（日比谷図書館）昭和6年まで途中何回か欠けているが続行されている。日比谷以外の館としては浅草，駿河台，京橋，両国等の閲覧傾向調査も見られる。ただ館内，館外の別が明らかでないものもあるのは残念である。

児童図書の目録，調査についてはこの他に次のようなものもある。

閲覧傾向から見た子供の好きな偉人　日比谷図書館　第69号（昭和12・2）

教材資料　伝記の部　日比谷図書館

これは被伝者の50音順の伝記図書目録で　第50号（昭和4・9）にはじまり 第62号（昭和7・4）までア……クの部まで掲載されているが以後中断されている。

アンデルセン翻訳書翻案書目録（和書44冊洋書9冊）

アンデルセン五十年祭記念展覧会に日比谷図書館より出品したもの　第32号（大正14.12）

電灯五十年祭に際し電灯に関する子供の読物　20種　日比谷図書館　第54号（昭和4・12）

雑誌の調査，林間学校貸出図書調査などもあるが省略する。大体児童図書をめぐってどんな作業が行われたかを知っていただければよい。これらの調査を綿密に対照分析すれば興味深いものがあると思うが，今はただ二三気づいたことを挙げるにとどめる。

(ロ)　多く読まれた図書と著者

この種の調査で最初に掲載されたのは大正10年下半期日比谷図書館児童部（第9号）である。閲覧図書順にあげられた30種の図書全部は紹介できないので上位五冊をあげると，〝軽い王女〟（矢口達）〝たから船〟（松本苦味）〝小学お伽噺〟（沼田笠峰）〝黒い小鳥〟（鈴木三重吉）〝じゃんけん国〟（渋沢青花）次いで巖谷小波〝お伽巡礼〟・〝お伽花見車〟・〝教訓お伽噺〟の三冊がつづく。小波は下位に〝新お伽百話〟〝世界お伽噺〟二冊もみえている。最下位に〝春浪快著集〟（押川春浪）もある。

大正11年上半期　(第9号)　30冊

〝新訳ロビンソン漂流記〟（平田禿木）〝船のりシンドバット〟（久米正雄・小島政二郎）〝新訳アンデルセンお伽噺〟（長田幹彦）〝ろしあお伽噺〟（昇曙夢）〝三人兄弟〟（菊池寛）他に小波は，〝小波お伽百話〟〝世界お伽噺〟第一・二・八・九集〝教訓お伽夜話〟と7冊もある。

同時期に一橋図書館（後に駿河台）の調査も掲載されている。

大正10年　30種　上位から5種をあげる。〝世界お伽噺2〜10〟〝日本昔噺〟3冊（小波）〝星の女〟（三重吉）〝世界童話集〟（榎本秋村）〝東京府各学校試験問題及答案〟（芳進堂）この他 小波〝お伽パラダイス〟〝お伽十八番〟三重吉〝黄金鳥〟〝馬鹿の小猿〟〝鼠のお馬〟〝魔女の踊〟〝湖水の女〟小川未明〝金の輪〟など。

大正11年　30種　上位5種〝世界お伽噺　2〜10〟〝日本昔噺〟3冊〝日本お伽噺〟8冊（小波）〝幼年ポンチ〟（木村小舟）〝欲ばり猫〟（三重吉）この他に小波1冊，三重吉3冊，〝ろしあお伽噺〟〝ろしあ童話集〟（昇曙夢）などがある。

以上4回の調査のうち〝ロビンソン漂流記〟4回，〝イソップ物語〟3回〝アラビヤンナイト〟3回　でているのなど見ると当時の読書傾向がほぼ察せられる。

大正11年下半期　30冊（日比谷）第13号

〝西遊記〟（中島孤島）〝春浪快著集〟3（春浪）〝魔王の首〟（水島牛歩）春浪快著集〟1（春浪）〝少年島〟（加藤朝鳥）他に春浪〝春浪快著集〟(2)〝武侠の日本〟の2冊，小波，三重吉の名もみえる。〝ロビンソン漂流記〟（平田禿木）〝ろしあお伽噺〟（昇曙夢）もみえている。

大正12年上半期　35冊（日比谷）第16号

〝黒い沙漠〟（三重吉）〝魔法くらべ〟（井上芳子）〝お菓子の城〟（山村暮鳥）〝黄金の獅子〟（吉岡・高野）〝笑の爆弾〟（松山二郎）他に小波，三重吉，春浪，アラビアンナイト・ロビンソン漂流記，イソップ物語など引きつづき姿をみせ，ここで佐々木邦〝あべこべ物語〟も顔をみせている。

時期により多少の差をみせながらも追々冒険，探検，美談，伝記，軍事もの，或は学習参考書などが増加してゆく。そして日比谷図書館のこの形の調査は，昭和6年

下半期を最後として誌上から消え去り，後は伝記索引，選定又は推せん図書目録などとなる。

昭和5年上半期　館外（日比谷）第57号

〝自習受験小学生の地理〟 尋六用〟（三省堂）〝あゝ玉杯に花うけて〟（佐藤紅緑）〝暁の歌〟（大倉桃郎）〝答案式国語模範自修書　尋六用〟（木山淳一）〝高等小学全科学習書〟（学習社）〝豹の眼〟（高垣眸）〝馬賊の唄外一篇〟（有本芳水）この時には紅緑，桃郎，眸の他江見水蔭，押川春浪，佐々木味津三，小酒井不木，桜井忠温の顔がみえている。〝アラビアンナイト〟（杉谷代水）は依然として読まれている。

日比谷の調査は比較的高学年向の図書に限られているが，一つだけ低学年向図書の調査があるのでそれも引用しておこう。

昭和3年4月5日（日比谷）第49号

尋常一年生

〝日本昔噺モモ太郎〟（北村寿夫）〝カチカチ山〟（同前）懸賞文集ツヅリカタノホン尋常一の巻（初等教育研究会）〝あるき太郎〟（武井武雄）〝正チャンの其後〟（織田小星）

尋常二年生

〝正チャンの其後〟（同前）〝日本昔噺モモ太郎〟（同前）〝カチカチ山〟（同前）〝あるき太郎〟（同前）〝ツヅリカタノホン尋常二の巻〟（同前）

尋常三年生

〝正チャンの其後〟〝あるき太郎〟〝モモ太郎〟〝カナレキシオトギ第一編〟（岡本瓊二）〝正チャンとリス〟（織田小星）

これと少し変って京橋図書館の学年別調査をみると

第64号（昭和8・3　児童図書館号）

一，二年は

〝バケモノタイヂ〟（金の星社）〝カナイソップオトギ〟（樋口紅陽）〝大なみ小なみ〟（日本童話研究会）〝カタカナオトギバナシ〟（樋口紅陽）〝カタカナカンシンナハナシ〟（杜修之助）9位に〝ワンワンものがたり〟（千葉省三）

三，四年は

〝漫画の缶詰〟（田河水泡）〝のらくろ上等兵〟（同前）〝おやかうこうのはなし〟（杜修之助）〝マングワイソップ〟（安泰）〝長靴の三銃士〟（牧野大誓）9位に〝あるき太郎〟（武井武雄）

五，六年は

〝我等の空軍〟（少年国防会）〝趣味の小学国史〟（平田金造）〝我等の陸海軍〟（平田晋策）〝日清戦争物語〟（遠藤早泉）〝一休さァんと珍助〟（宮尾しげお）

(ハ) 東京市児童読物研究会

さきに述べたように児童文学作家などで組織された〝児童読物研究会〟は昭和12年6月以後つぶれてしまったが，同年3月には官制の〝東京市児童読物研究会〟が生まれ，活発な活動を行った。当初の記録をみると，

「本市図書館に於いては夙に児童読物に就いて多大の関心を有し，優良図書の選定，読書の指導等に努力して来たのであるが，これ等の事業は学校及家庭と協力してこそ完璧を期せられるものである。

玆に東京市児童読物研究会を設立し，会長に東京市教育長を推し，本市図書館関係職員，視学，小学校訓導を会員として児童読物の調査研究をなし，左の事業を行ふことになった。

1. 児童読物の研究調査
1. 優良なる児童読物の推薦
1. 児童読書指導に関する研究調査
1. 児童読書趣味の涵養普及に関する施設経営
1. 其他本会の目的を達せんが為に必要なる事業」

これは後に2部制にし，部会と全員総会を毎月開き，昭和14年最終号まで推せん図書の掲載が行われている。

どんな図書が推せんされたか。

第1回（昭和12年3月）

野村瓊子〝七つの蕾〟童話作家協会〝日本童話名作選〟槇本楠郎〝月夜の滑台〟菊池寛〝日本建国物語〟

第2回以後（昭和12年8月）

推薦図書〝人生案内〟（水上滝太郎）〝教訓名画集〟（講談社）〝金太郎〟（講談社）〝乗物づくし〟（講談社）

優秀図書〝驚異の科学〟（柴山雄三郎）〝文章の話〟（里見弴）〝小学文学童話〟（小川未明）〝子供知識〟（講談社）

良書　5冊　省略

優秀図書〝小学科学読本　砂糖〟（鈴木文助）〝同石炭〟（箕作新六）〝花咲爺〟（講談社）〝東郷元帥〟（同前）〝輝く海城〟（西崎善男）

良書　4冊略

この体裁からみてこれは2回にわけて推せんされたものと思う。以後は回数は示されていない。

第72号（昭和12・11）に掲載

〝われ等の空軍〟（大場弥平）〝ノンニ兄弟の冒険〟（上沢謙二訳）〝ケティ物語〟（杉原至大訳）〝特選童話〟（村岡花子）〝少年少女名作物語〟（須藤克三）〝征空

冒険記〃（中正夫）〝海洋冒険探検記〃（池田宣政）〝父なればこそ〃（水谷まさる）

この時から解題がつき，この後3回発表されている。これがどんな風に普及され，効果があったか不明であるが研究会は昭和17年まで継続されているようである。

(二) 中間読物目録

京橋図書館では昭和7年より毎年1回「中間読物目録——少年期より青年期にうつりかはるころの若き人々のために——」という目録を区内尋常小学校，高等小学校卒業生に配布していた。これは昭和16年までつづけられた。これは目録だけで館内に特別の集書はしなかった。

3.4.4　各種行事——おはなし会他

〝東京市立日比谷図書館一覧　自明治45年至大正2年〃には「四十三年中ヨリ閲覧ノ多キ図書ヲ選述シタル著者ヲ聘シテ臨機著者講演会ト称スルモノヲ催スコトトナシ第一回ハ十月ヲ以テ一般閲覧人ノタメニ第二回ハ十一月ヲ以テ児童ノ為ニ開始シタルニ其成績何レモ意外ニ好良ナルコトヲ認メタルニヨリ爾后毎年之ヲ行フコトトシタリ」とあり，更に〝東京市立図書館一覧　大正3年〃には「本市ハ又市立図書館ノ副次的事業トシテ各館毎，年二回以上一般閲覧人及ビ児童ニ対シテ各種ノ講演会を開催シ」とあるように子どものための講演会，おはなし会はその後盛に行われるようになった〃。

既に〝図書館雑誌〃 2号（明治 41.2）には「米国に於ける談話時間」同12号（明治 44.4）には「図書館に於ける講話時間（ストーリーアワー）」と題し，アメリカのストーリーアワーの状況を伝えている。

大正10年10月創刊の〝市立図書館と其事業〃の刊行は不定期であったが，その彙報欄には各館のニュースが掲載され〝児童講演会〃の記事がしばしばみられるようになった。初期の頃のものを挙げてみよう。

第3号（大正 10.12）

台南図書館　11 月5日

三匹の蛙	松美佐雄氏
松平長七郎の初陣	天野雉彦氏

中和図書館

三つの人形	松美佐雄氏
巴里からアラスカへ	安倍季雄氏

「就中中和図書館は聴衆千五百名。前記講演の外，声名ある青年音楽家田中英太郎氏（ヴァイオリン）岩田九一郎（ピヤノ）両氏の篤志な演奏と，皆川岩井二少年の岩田氏の作曲にる係る童謡「あはて床屋」の二部合唱等があって，頗る盛会であった。」とあり，講堂にいっぱいの絣や縞の木綿の着物の男の子の後姿が写されている。

第11号（大正 12.2）

外神田図書館児童講演会　12 月2日

金貨の海嘯	安倍季雄氏
童　謡	若林小学校児童

入場者　千五百人

小石川図書館児童講演会　12 月10日

童　話	玉ノ井宗一外二名
綴方の上手下手	平田義雄氏
合唱・対話・演説・演奏	青柳小，小石川高小生徒

入場者　五百人

第16号（大正 12.9）

〝大正十一年に於ける東京市立図書館の概況(中）より講演会に限らず児童関係の記載を抽出してみると，

日比谷図書館

児童図書目録の刊行　大正11年7月現在の蔵書を分類収録したもの。

一橋図書館

児童図書帯出事務の改善　日比谷図書館児童部の勧告に従ひ従来の複記式を廃して日比谷図書館式（註前述）とすることとし九月一日から実施

氷川図書館

児童の自治的閲覧　1月より尋常5 6年生に図書の出納，閲覧室の管理整頓をさせ館員は監督指導をする。将来図書館事務中機械的消極的事務を閲覧者の自治とし館員は主力を閲覧者に対する積極的指導に傾注しようとするため。

副次的事業

日比谷図書館

小学児童作品展覧会　交通政策・機関・道徳に関する図書約百冊　交通道徳会本館

一橋図書館	児童講演会（12月2日）
小石川図書館	児童講話会（12月10日）
本郷図書館	児童娯楽会　10 月15日　200 人

深川図書館

展覧会　毎月1回　児童閲覧人の自由画，童謡に絵を添えて展示

騎士会　尋常3年生以上，館員指導の下に児童室内の整理，出納，児童との連絡をさせる。利用経営両面より図書館事業を理解させ将来の優良な閲覧人を養成するため

以上で解るようにその名称は講演会・講話会であり，

話し手は多くロ演童話の大家，広い講堂に500〜1000人とつめかける子どもを対象としていた。従って図書館雑誌に紹介され，現在児童図書館員たちが習得しているストーリーテリングとは異り，娯楽を目的としていた。〝副二的事業〟とよばれる所以である。この傾向は長く続くが反面，児童室でささやかに館員や子どもたちがお話をすることが昭和7年頃からはじまっている。特に京橋図書館では児童係だけでなく多くの館員が参加して交替にお話をした。だがこれも昭和12年頃より行われなくなっていく。時局を反映して行われなくなったのか，ニュースにのせなくなったのか，或は館員交代のせいか，理由はいろいろあろう。具体的にみるために再び〝市立図書館と其事業〟から抜萃してみよう。（話し手の氏名に敬称のないものは館員である）

第63号（昭和 7.11）

駿河台図書館　児童室に於てお話会開催9月18日　参加者 135 名

元気な少年の話　青木義雄

中江藤樹先生の話　高坂文哉

氷川図書館　小童話会　9月中第二第四日曜日に開催，参加者第一回80名　第二回 230 名

第64号（昭和 8.3）　児童図書館号

駿河台図書館

お話会　10月30日　参加者80名

青い帯　宮沢泰輔

かくれみの　波多野賢一

クリスマスの集ひ　12 月27日　参加者600名

出演者　小学生　プログラム　ハーモニカ合奏　童話〝魔法の井戸〟〝拾った金貨〟童話劇〝黄金の斧〟〝護国の勇士〟琵琶〝満洲事変〟童謡踊・合唱等。

京橋図書館

京橋こども大会　10 月30日　京橋公会堂　参加者　1,200 名

プログラム　童話——有元正先生，土田博先生，天野雉彦先生　童謡舞踊——小学生，童話劇——児童部

京橋こども会例会　自第一回至第三回　児童室　参加者 80〜100 名

第 一 回　11 月19日

御褒美の椎の実　中村繁次郎君（高 1）

二人の旅人　小林桃一

竜王のお使　植田秋作

アラビヤンナイト物語　松本文君（高 1）

第 二 回　12 月3日

大岡政談　高橋辰男

アラビヤンナイト物語　松本文君

羅馬建国の由来　荒井忠市郎氏

仏蘭西少年の愛国心　有元　正氏

第 三 回　1 月21日

お話を土産に買った話　小河内芳子

僕と兄さん（絵噺）　長谷川清君（小 1）

姨捨山　小林桃一

クリスマス童話大会　12 月27日　講演室　参加者　400 名

プログラム　歌，ハーモニカ，舞踊——小学生，童話——大橋　実，土田博先生，有元正先生。

浅草図書館　児童講演会　11 月7日

木下藤吉郎の出世について　竹内善作氏

満洲国の実地踏査　加藤知恵氏

映画　動物の国・ザンバ

深川図書館　童話大会　11 月6日　児童室

参加者　750 名

講師　文部省樫葉 勇氏，白倉文伴氏，池谷八十子氏。

第65号（昭和 9.3.）

駿河台図書館

館員交代のため送迎おはなし会　6 月17日　児童室　参加者　213 名

御挨拶　西里菊子・角田綾子

童　話　宮沢泰輔

ガリヴァー旅行記（紙芝居）　児童部演出

童　話　柏原　堯

誉れの軍馬（紙芝居）　児童部演出

京橋図書館

児童部見学団　9 月17日　26 名　児童係引率　東京科学博物館

読書指導図書館利用指導

1 月30日　京橋小3年　200名来館　自由閲覧と読書指導

9 月 28〜30 日　京橋高小1年200名来館　館内各室にて実地指導

京橋こども会　第 5〜15 回

2 月4日　つばめの話　山本覚之助

ハーフ童話　井手伊記男

ヴェニスの商人　大橋　実

2 月18日　お　話　秋岡館長

山のお話　植田秋作

黒馬物語　小林桃一

3 月18日　朝鮮の虎　　田中金之助
　　馬のない国　　小林桃一
4 月15日　お　話　　秋岡館長
　　追はれた犬　　植田秋作
　　アンディン　　田中金之助

以後毎月 1～2 回行われその報告が記載されている。京橋図書館ではこのようなおはなし会はその後回数がへるが続けられており，その他に見学，遠足，展覧会，こども大会，或はコドモ新聞の発行等が昭和12年5月頃まで行われている。そして

市立図書館と其事業　第71号（昭和 12.8）
京橋図書館
京橋コドモ会例会　4 月17日及び4月24日の両日夫々午後2時より児童室にてお話会を開く。
春季遠足会　5 月9日　児童有志 24 名は係員4名の引率の下に大宮八幡神社及び柏ノ宮公園方面に遠足す。……
コドモ新聞　第20号発行　4 月23日
中間読物目録　第5号発行　3 月
京橋区内各小学校の本年度卒業児童三・千名に配布せり。

この号にはその他に，この年小学校国語読本に「図書館」の一課が加えられたため，各館に小学生の見学のあった記事もみえる。同誌はその後72号（昭和 12.11）73号（昭和 13.3）74 号（昭和 13.8）75 号（昭和 14.3）76号（昭和 14.3）で終りを告げたようである。そして72号からは彙報欄の各館ニュースは少なくなると共に戦時色を濃くし，こども会は2回だけでている。代って，職員異動，社会教育課長や掛長を講師とする行政事務に関する職員講習会の記事などが巾を利かせるようになった。

3.4.5　貸出文庫その他

大正11年7月から貸出文庫がはじまる。これも日比谷が主であるが他の館でもやっている。対象は主として夏期林間，臨海学校で50～200冊位。更に区内小学校の学級文庫，セッツルメントや託児所，青少年団への貸出文庫の記録もみられる。これが強化されたのが昭和7年。前年に組織変更があり，図書館行政が社会教育課の手に掌握されて1年を経た時である。〝市立図書館と其事業〟第62号（昭和 7.4）巻頭論文〝図書館の社会性〟（図書館掛長　苅宿俊風）は次のようにいう。「現代は社会自覚の時代であると謂われてゐる。どんな個人的色彩の濃厚な事業でも，何程かの社会的役務を自ら求めて之に応ぜんとしてゐる。……図書館は社会の機関であるといふ点を自覚し，その社会的機能を発揮」しなければならぬ。その「積極的方面を考ふるに先づ図書館の方から進んで社会の中に入り，求めてそれ等の人々と手を握らなければならぬ。小学校，青年団，その他の教化団体との聯携を図り，殊にその児童文庫，青年団文庫担当者と懇談を遂げ，その向上発展に資するも一つの方法であらう」そして労働者，失業者などのため一層の活動が必要だと説き，更に「消極的方面としては社会の動きをよく洞察し，それに適応し，更にそれを指導する方針のもとに，図書の選択，購買を企画すること……例えば思想問題に関する書籍の選択編輯に当ては凡て系統的に合理的に而も指導的に之を為し「思想文庫」を設けるといふふうに行うべきである」といい，次の頁に〝児童文庫並青年団文庫関係者協議会概況〟が記されている。

これは「現存する市立二十図書館が館内閲覧及び帯出閲覧以外に市立各小学校の男女児童に良書普及読書指導を目的とする図書館事業の社会的普及化と青年団に対する図書館の積極的活動とを計る目的なのである。」とし，市立図書館を中心に7区にわけ，各地区で図書館，学校，文庫担当者が懇談協議会を開くことになった。早速3月中に各区で懇談会，協議会が開かれ実施にうつることとなる。しかしながら次号（昭和 7.11）でその進行状況をみると

駿河台図書館　青年団貸出文庫　6青年団貸出図書1組 10～30 冊　期間　10日～1 か月
両国図書館　家族巡回文庫　50家族対象，1組4冊10組編成　期間5日
　青年団文庫　1 組15冊　2 箱　期間15日
浅草図書館　青年貸出文庫2ケ所開設その読書傾向として〝西部戦線異状なし〟〝ブラックチェムバー〟〝国史人物論集〟〝古人に学べ〟〝久遠の女性〟がよく読まれた
外神田図書館　鉄道職員貸出文庫，秋葉原駅長の要請による。100 冊　15 日更新
日本橋図書館　青年団と打合せ中
小石川図書館　臨川青年団夏期施設に図書 100 冊　雑誌 100 冊　10日間貸出

の記事があるのみ，小学校の児童文庫については何らの記事がない。青年団文庫についても，第65号（昭和9.3）に駿河台図書館青年団文庫の利用数が記されているが，6青年団中3青年団が，昭和8年2月～7月の間に

都合により中止している。これでみると，形だけは華々しく上からの命令で歩きだそうとしたけれど，予算人員の裏づけもなく立消えてしまったのではないだろうか。図書館側が従来から自主的に行っていた夏期施設への児童図書貸出は相変らずつづけられたようであるのに。

ずっと後になって，第74号（昭和 13.8）に〝児童文庫の新経営〟（本所図書館 北条治宗）なる一文があって，次のように述べている。

「大正の末期から昭和の始めにかけて自由教育主義思想の盛んであった頃，各地の小学校では一種の流行物の様に，各学校に学級文庫とか児童文庫を施設したものである。所で此の学級文庫や児童文庫の現状は果して如何なって居るであろうか，自学自習は学級文庫からとまで潮に乗った施設であったが，昨今では殆んど顧る人さへまことに少い時勢になった」として，教室の隅の本箱に埃にまみれ，破損した本が「老後の安逸にひたって居る」とその状況る述べている。 そして教師も16ミリ映画教育の華かさにより魅力を感じ，「紙芝居の先端的な所に時代を呼吸した事だらう。」といっているところにくると，戦後の学校図書館と視聴覚教育のことなど考えて興味深く思う。更に「たまたま改訂の国語読本巻九に図書館の一課が設けられた為め，多少乍ら児童図書館，学級文庫，児童文庫などを省みる向きの生じた事は嬉しいが，今更熱のさめた施設を此の長期戦時に当ってどれだけ甦生させる事が出来るか疑問である。」と述べているが，前記の社会教育課の指導する児童文庫について何もふれていないことからみても，殆んど実効があがらなかったのではないかと思う。それにしても学級文庫，児童文庫が衰えた時期に図書館の一課が設けられたことと，新指導要領で読書指導が国語科の一部として強化されることと，何等関連はないものだろうかとふと思う。勿論，戦前と現在では教師，図書館員，市民の意識も大きなちがいはあるのであるが。

この「児童文庫の新経営」の主張する新経営は，「従来の文庫が閲覧人を指導の対象としたのに反し，私は文庫の係員を指導の対象とするのである」といっている。

以上述べてきたように東京市立図書館の児童奉仕は多面的で相当な努力が払われてきたと思うが，学校との交渉はその割に少なかったように思う。図書館の大半が小学校内に附設されていたにも拘らず学校に対するサービスの主なものは夏期施設に対する，或は夏休み中の小学校への貸出文庫であり，若干の小学校からの参観であった。児童図書館員が学校に出むいていって教師と話しあい又は生徒たちに話すことなど殆どなかったようである。

このような中でひとり特異なのは深川図書館である。深川図書館では区内学校との関係が密接であったようで，それは館長を通してなされていたようである。

〝館報〟第64号〝児童閲覧室の純なる光を浴びて〟（深川図書館児童部）には当時の深川図書館児童室の活動状況が書かれ最後に，「左に当深川の児童部が過去五年に行った，内外行事の目録を記して本稿の責を果すことゝした（田所糧助記）」とし内部的事業10ケ条，外部的8ケ条をあげた中に「内部的事業――(ハ)区内諸学校に於ける修身又は科外の時課を利用する校長，訓導引率による児童の団体読書演習 (ト)区内幼稚園其他教化団体の参観（案内）(リ)月例童話の会 外部的事業――(ロ)教育文庫，児童文庫の編成派出 (ト)館長，児童部係員交番出張（随時）各学校長又は児童文庫係との接衝，(チ)海と空の座談会（各校順回）」という条項があり，昭和7～10年頃までの彙報欄には盛に実行された報告が掲載されている。

館長はしばしば学校を訪れて講演をし，学校からの参観，読書演習，幼稚園児童の訪問など月数回行われている。このうち〝海と空の座談会〟は図書館主催の行事かどうか不明であるが館長が熱心に出席し講演，司会等をしている。この会には将校も出席し講演し，模型飛行機製作や，帝都上空を児童代表と館長が乗って飛ぶ等，毎月活発に行われていたようである。

童話会も毎月又は隔月に開かれ常設講師として文部省樫葉勇氏の名がみえる。5月27日「日本海海戦三十周年記念日児童大会」「乃木大将を偲ぶ会」なども小学校講堂をかりて行われ盛会であったことが記されている。

これほど積極的に児童奉仕の面で当時の〝国策遂行〟に努力した図書館は他に見当らないので記しておく。

(6) 戦時下の児童奉仕

〝市立図書館と其事業〟が昭和14年以後ないので，その後の児童奉仕についてはまとまった資料がない。僅かに京橋図書館事務日誌が昭和20年7月まであって少しばかり児童奉仕関係の記事があること，〝公立図書館略史〟〝と千代田図書館八十年史〟に戦時下東京の図書館の状況が記されているのでそれを手がかりに探ってみる。

戦争中館員が出征その他で人員不足になるとまっ先に閉鎖されたのが児童室だ，という話を聞く。そうでもあろうかと思われるがはっきりした記録はない。戦前，小学生の頃から品川図書館を利用しており，戦後は同館員

となり，品川の歴史に詳しい伊藤旦正氏の話によれば「応召による人手不足のため昭和13年階下にあった児童室を閉鎖し，階上の一部を衝立で仕切ってあった婦人閲覧室をそこにうつした。児童図書は大人にだけ貸出していた。」ということである。更に空襲が激しくなると，昭和19年12月には都立図書館の児童図書を疎開地学童に送ることが協議されたようで（京橋図書館日誌）それは「疎開を兼ねた閲覧事業として，全部の疎開学童並に職員を対象とする〝疎開学童職員文庫〟の編成を企て，区教育課の支援を仰ぎ，各学校職員の努力によって，約42,000冊の図書を各集団疎開先に振り向けることに成功した。」（〝公立図書館略史〟）となり，児童奉仕は事実上閉鎖されたものとみていいだろう。 昭和20年3月大空襲の後は日比谷，京橋，駿河台，深川の4館以外は閉鎖，更に5月空襲で日比谷も全焼して，日比谷図書館事務所は7月京橋図書館に移り，他はすべて閉館となった。

京橋図書館日誌昭和20年7月1日をみると「日比谷図書館事務所ヲ本館ニ移転セシニヨリ本館職員ハ日比谷職員ト合併……

依リテ日誌ヲ停止セリ」となっている。

だが，昭和13年以後，同日誌の記事の中に，防空演習のこと，国民精神総動員，戦勝祈願祭への館員の参加，応召者の歓送会などが追々ふえていく中に，児童奉仕に関係するものが何かないかと探してみると若干あった。

昭和13年　3月雛祭童話会，帯刀貞代氏児童室参観

〃　14年　3月生活社記者児童読物傾向聴取のため来館，5月玉川学園より児童室参観・中間読物目録 4,000 部受領12月横浜市立図書館より児童奉仕視察来館

昭和15年　5月中間読物目録 2,000 部受領

〃　16年　1月及4月品川方面委員長児童室設置のため視察，3月雛祭施行

4月中間読物目録2,000部受領5月品川方面館児童文庫開設式典に館員参列。端午節句童話会，野田醤油伊藤氏児童室来館・育生園育児部栗原氏児童室設置のため来館　9月近江兄弟社より児童室見学

昭和17年　3月雛祭会開催・名古屋市立図書館児童係来館　6月紙芝居童話朗読会開催　8月児童による劇開催　11月学童会開催3回

〃　18年　1月児童読書指導のため戦時生活局より来館・読書指導のため府立第一高女浅田先生・大学生5名来館　8月児童延滞督促状157通発送

この年9月重要物資現在高調査があり10月には鉄製書架を木製と入替えるため1週間休館している。

〃　19年　12月12日疎開地向児童図書に関する件で館長他1名出張

以上の他，児童読物調査会のため毎月館長又は館員が出張することが昭和17年1月まで記されている。

日誌は丹念にみたが児童室を閉鎖したという記事はないので，図書館が開館している限り開いていたのではないかと考えられる。もしそうだとしたら子どもたちはどんな様子であったか知りたい。又，疎開学童職員文庫が疎開先でどのように利用されたか，されなかったかも知りたいところである。

日比谷図書館児童図書はすべて複本が購入されて補充又は保存のため，児童室の背後の書架におかれていた。今あれば貴重な資料であるが5月空襲で全部焼失した。疎開した児童図書も散逸してしまった。これが戦争というものである。

4　市立図書館と其事業

児童関係記事・評論一覧（除彙報欄）
第1号より第75号までの間
42・43・44・45 号欠除。

この稿を書くに当って終始引用してきた〝市立図書館と其事業〟には，本稿で引用しなかった多くの記事，評論がある。 本稿で多く彙報欄のニュースにたよったのは，活動の実態をできるだけ客観的に示そうとの意図によるものである。実際は彙報欄の児童関係ニュースも引用したものの倍位はあるのだが一応省略して彙報欄以外に記載された児童奉仕関係の記事，評論の一覧表をここに附記しておく。（この中にはすでに引用していて重複するものもあるが）

私の見ることのできた館報は第 42～45 号の4冊欠本となっているが，全体を把握するためにそれ程支障はなかったと思っている。いずれ見る機会があればこれを補促したい。 又この館報は第75号までであるが，これが本当に最終刊であるかどうかも不明である。

ともあれ，この一覧表を辿るだけでも児童奉仕の変遷がうかがえるであろうと思われる。

号	発行年月	標　題	備　考
1	大正 10.10	児童読物展覧会	日比谷

2 〃 10.11 日比谷図書館の児童室（児童帯出の巻）
3 〃 10.12 ——
4 〃 11. 1 ——
5 〃 11. 2 ——
6 〃 11. 3 ——
7 〃 11. 3 春季増刊 —
8 〃 11.10 秋季特別号 日比谷図書館児童図書分類目録
9 〃 11.11 米国各都市に於ける学校内設置の図書館分館を考察して東京市の現状に及ぶ 竹内善作
北米合衆国における婦人児童図書館員の面影

児童用図書百種

12 大正 12. 3 ——
13 〃 12. 4 読書趣味の養成と師範学校 今沢慈海
14 〃 12. 7 ——
15 〃 12. 8 コドモの絵の批評 岡野武雄 山本義雄，柴野民三
16 〃 12. 9 ——
17 〃 13. 3 春季特別号 日比谷図書館増訂 児童図書分類目録
18 〃 13. 3 ——
19 〃 13. 7 ——
20 〃 13. 7 ——
21 〃 13. 8 ——
22 〃 13. 9 学校図書館に就て 今沢慈海
23 〃 13.10 ——
24 〃 13.11 師範教育の改造と学校図書館の設置（主として中小学校のために） 竹内善作
児童用図書百卅種 日比谷
25 大正 13.12 ——
26 〃 14. 1 少年科学者の集ひ 日比谷
27 〃 14. 2 ——
28 〃 14. 3 ——
29 〃 14. 3 ——
30 〃 14. 4 児童部館外作業いろいろ (1) 日比谷
31 〃 14. 4 同 上 (2) 〃
32 〃 14.12 アンデルセン飜訳飜案書目録 小谷誠一
一橋コドモ会
33 〃 15. 2 ——
34 〃 15. 3 ——
35 〃 15. 4 ——
36 大正 15. 9 ——
37 〃 10.10 ——
38 〃 15.11 米国学校図書館考 上 竹内善作
児童読物九十五種 日比谷
大正十五年上半期館外児童図書閲覧順位表 日比谷・浅草
〝図書館から家庭へ〟 推奨児童雑誌五種 竹内善作
39 〃 15.12 浅草図書館に於ける大正十五年上半期児童図書館内閲覧順位
40 昭和 2. 2 大正十五年下半期 児童図書閲覧順位表 日比谷
41 〃 2. 4 大正十五年下半期児童図書閲覧順位表 日比谷
42 〃 2.11 児童は図書館をどう見ているか 竹内善作
（欠本，目次ノミ）児童読物六拾種 日比谷
43 〃 2.12 本所高等小学校の児童文庫 小谷誠一
（欠本，目次ノミ）昭和二年上半期児童図書閲覧順位 日比谷外
図書館遊戯 竹内善作
44 〃 ——
45 （欠本） ——
46 〃 3. 7 広義児童読物に就いて (一) 今沢慈海
47 昭和 3. 9 児童図書館外閲覧順位表 昭和三年上半期 日比谷
48 〃 3.11 〝切抜帖より〟 児童閲覧室の大入り（日比谷）
図書館週間選定児童読物 解説付 日比谷
49 〃 4. 1 広義児童読物に就て (二) 今沢慈海
50 〃 4. 4 児童図書館外閲覧順位表 昭和三年下半期 日比谷
51 〃 4. 0 教材資料 伝記の部 (一) アーアン
52 〃 4.10 同 上 (二) イーイン
53 〃 4.11 ——

54　〃　4.12　児童絵雑誌の研究　宮沢泰輔
電灯に関する子供の読物　日比谷
教材資料　伝記の部　㈢　ウーオウ
55　〃　5.2　——
56　〃　5.4　同　上　㈣　オウーオヤ
同　上　㈤　カーカメ
57　〃　5.10　児童図書閲覧順位表　館外　昭和5年上半期　日比谷
中間集書に就て　令沢慈海
58　昭和　5.11　児童読物五十種　日比谷
59　〃　6.3　教材資料　伝記の部　㈥　カーキボ
61　〃　7.4　——
62　〃　7.4　児童文庫並青年団文庫関係者協議会概況
児童図書閲覧順位表（館外）昭和六年下半期　日比谷
教材資料　伝記の部　㈦　キークロ
63　〃　7.11　推奨児童図書　日比谷
64　〃　8.3　〝児童図書館号〟
児童室の問題　広谷宣布
児童室の純なる光を浴びて　深川図書館児童部
児童読物調査表　駿河台
こどもはどんな本を好むか　京橋
児童読物と中間読物　日比谷・京橋
児童室の御定連　北条治宗
65　昭和　9.3　児童図書閲覧傾向　日比谷（数のみ）
児童雑誌　〃　〃　〃　（雑誌別）
児童読物調査表　駿河台
児童の学年（年令）と読書傾向　駿河台
66　〃　10.3　児童室を経営して　帝大セツルメント
67　〃　10.3　——
68　〃　11.3　——
69　〃　12.2　閲覧傾向から見た子供の好きな偉人　日比谷
児童の読書傾向と住所調　四谷
麹町区夏期臨海学園児童図書の状況　麹町
図書館週間中に読まれた推薦児童図書閲覧順位表　日比谷
70　〃　12.3　公共図書館と中等学校生徒の問題（上）
中間読物目録について　小河内芳子
東京都児童読物研究会　第1回推薦図書4冊
71　昭和　12.8　「図書館」に関する座談会　附小学読本巻九第十七図書館抜萃
児童作文（図書館に関する）
児童読物調査会報告　（研究会改称）推薦図書　21冊
72　〃　12.11　児童読物調査会記事　推薦図書　8冊
皇軍慰問児童画
73　〃　13.3　児童読物調査会　推薦図書　25冊
74　〃　13.8　児童文庫の新経営　北条治宗
児童読物調査会推薦図書　17冊
75　〃　14.3　児童と漫画　宮本泰輔　推薦児童図書　18冊
76　〃　14,3　——

5　おわりに

書き終ってみると，引用にはじまって引用に終り，鋏と糊のメモになってしまった。だが鋏のいれかたと糊のつけかたで多少は歴史が解ってもらえて，戦前の東京の児童奉仕の成果と欠陥もさぐれるのではないかと考えるのだがどうであろうか。

私の考えでは，児童室内の奉仕活動は多彩であり活発であったが外部への働きかけは弱かったと思う。学校に対しては臨海，林間学校への貸出，学級文庫の貸出，学校からの参観などあったけれども積極的，継続的とは必ずしもいえなかった。又，地域の人たちに対し，子どもを通じての働きかけに至っては皆無に等しかったようである。これは図書館員の自覚や努力だけではどうしようもない壁があったともいえるのだが，そして又これは児童奉仕についてだけでなく，図書館奉仕全体についていわれることだろう。先覚的な人びとは学校へ，社会へといっているがなかなかそこに浸透していくことは困難であった。子どもの読書に対する考え方も課外の読書など余計なものというのが一般的であった。「本ばかり読んでいないで手伝いなさい。勉強しなさい」と本好きな子の多くがこのようにいわれていた。

今，子どもの読書に対する考え方も，図書館に対する認識も，図書館員の姿勢も大きく変りつつある。まだまだ幾多の矛盾をはらみながらも戦前とは格段の差をみせ

はじめている。子どもたちも多くが図書館を知り，利用の経験もひろがっている。しかしこれはひとり図書館だけの変化ではなく，社会全般の動きの中で変容しつつあるのである。その意味でこの稿も，はじめに述べたように，社会的背景のさまざまな動きとその関連においてとらえ示さなければならなかったのであるが，ご覧のとうりである。

ただしかし，今まであまり発表されなかった資料の一部を抜萃し引用することで何程か参考になれば幸いである。

戦後の変貌をも含めて児童図書館史が書かれれば世界の児童図書館史の中でも特異な地位る占める興味深いものができるのではないかと思う。いつの日か，誰かの手でそうした児童図書館史が書かれることを願ってこの稿を終えたい。

参 考 文 献

東京市立日比谷図書館一覧　自 明治 41 年 至 〃 42 年
〃　自 〃 42 年 至 〃 43 年
〃　自 〃 45 年 至 大正 2 年
東京市立図書館一覧　大正 3 年
〃　自 大正 4 年 至 〃 5 年
〃　大正 7 年
市立図書館と其事業　自 第 1 号 大正 10 年 至 第 75 号 昭和 14 年 (42・43・44・45 号欠)
東京都公立図書館略史　1872-1968　東京都立日比谷図書館　1969
五十年紀要　東京都立日比谷図書館　昭和 34.
千代田図書館八十年史　千代田区　昭和 43.
昭和 41 年度品川区立図書館事業年報　品川区立図書館　昭和 43.
帝国教育会五十年史　帝国教育会　昭和 8.
大橋図書館四十年史　坪谷善四郎　博文館　昭和 17
図書館雑誌　第 2 号　明治 41. 2
〃　第 12 号　明治 44. 4
〃　第 16 号　大正 12. 3
楢の落葉——図書館関係雑文集——　仙田正雄　昭和 43
児童図書館の史的研究　竹林熊彦（土　第 29 号　金光図書館　昭和 28.10）
東京市立図書館の児童室 (一) 日比谷図書館開設より関東大震災まで　小河内芳子　（図書館研究　復刊第 3 号　図書館職員養成所図書館学会 1957）
少年文学史　上・下・別巻　木村小舟　童和春秋社　昭和 17.18
増補改訂 日本の児童文学　菅 忠道　大月書店　昭和 31
児童文学辞典　白木茂等編　東京堂出版　昭和 45